

【取材を通じて感じました】

リゾートは再定義されます。

かつてリゾートとは、多忙を極める都市居住者が休暇や余暇を過ごす保養地、あるいは避暑地のことでした。しかしここ数年で状況は一変しました。ネットワーク環境と情報機器が高度に発達したので、私たちは必ずしも会社に通勤する必要がなくなり、自宅はおろかカフェやホテル、旅先あるいは海外など、どこでも仕事ができる環境が整備されてきました。今後リゾートをレジャーで訪れる行楽地としてだけでなく、自分の「ライフサイクル」が移行するにつれて関係性が変化する空間として捉えたほうが私たちのライフスタイルはより幅広くなるでしょう。

「リゾート」という言葉には「根源を求める」という意味もあります。超高齢社会となり人生の在り方や働き方が見直されつつある今こそ、都市居住者が自分の根源を求める場としてリゾートの在り方を再定義できるのではないのでしょうか。合歓の郷「リゾート・ヴィレッジ」は「ライフサイクル」を通じて都市と行き来することで自己を確立し、いきがいを発見できる最適の地なのです。「ライフサイクル」の視点で、このリゾートが「自己啓発コミュニティ」として生まれ変わるの、必然かもしれません。なぜならば伊勢と熊野につながるこの地は「神々の都」と言ってもいい聖域として、神代の昔から「常若」と「蘇り」つまり身体も心も魂も生まれ変わるという神話をもっているからです。



建築家・コミュニティデザイナー
中埜 博

建築理論「パタンランゲージ」の第一人者として学校づくりや街づくりプロジェクトに参加。著書に「パタンランゲージによる住まいづくり」「パタンランゲージによる住宅の建設」「パタンランゲージ:創造的な未来をつくるための言語」など

(注3)「パタン・ランゲージ」クリストファー・アレグザンダー
(注4)「ライフ・シフト—100年時代の人生戦略」リンダ・グラットン
(注5)「ワーク・シフト—孤独と貧困から自由になる働き方の未来図 (2025)」

「自然の秩序」の創造 Vol.1

Nature of Order

発行: 合同会社CEST 発行人: 中埜博 住所: 東京都新宿区中井1-7-14-102 企画監修: 代田デザインオフィス 編集制作: 株式会社ING 取材編集: 白鳥美子 撮影: 代田耕一

まちづくりの基本的な考え方

「まちづくり」はインフラや建物などハードだけを作っても決してうまくいきません。なぜなら「まち」には「生命^{いのち}」が必要だからです。「生命^{いのち}」とは「環境」「まち」「住まい」「ひと」「くらし」「文化」すべてが一体となって調和する「自然の秩序」そのものです。(注1) 私が「まちづくり」を考える際には、この「自然の秩序」の有無を「診断」し、「自然の秩序」の回復への「処方箋」を書き、その経過を「見守る」ように心がけています。

柔らかい街をデザインする。

コミュニティが「まち」と「ひと」を育てる

皆さんはギリシャ神話のスフィンクスの謎々をご存知ですか。

「朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。

この生き物は?」答えは「ひと」です。

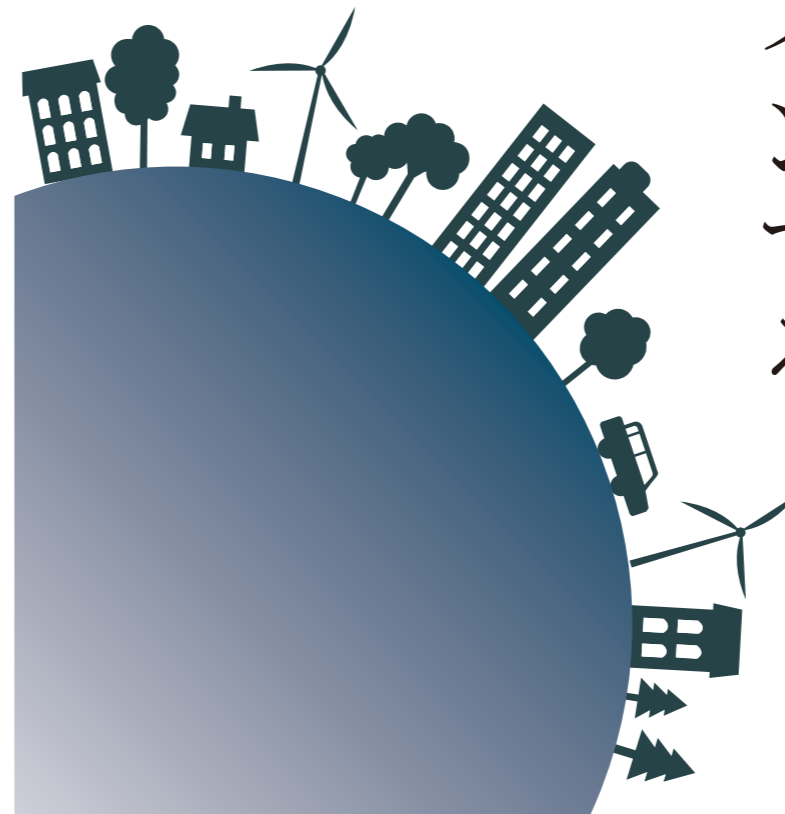
哲学者のエリックソン夫婦は「ひと」の一生を8つの段階に分類し「ライフサイクル」と名付け、「自己確立」「いきがい」などを発見するヒントを提示しました。それによれば「ひとは誰もがライフサイクルの中で苦しい葛藤を抱えるが、コミュニティ内の他の世代との交流によって苦しみが癒され、葛藤を解決し自己を確立し成長することができる」(注2)としています。

ところが現代は多世代からなるコミュニティが崩壊しつつあり、苦しみや葛藤を乗り越えることをサポートする社会環境も一緒に崩壊しています。昔は、誕生、成人、結婚、出産、引退など「ひと」の成長につれて、すべてが通過儀礼として確立されていました。この通過儀礼も曖昧化していることで同世代同士の交流さえも今や消えさろうとしています。つまり「まち」から「自然の秩序」が失われつつあるのです。これは「ひと」から「自己確立」の機会と「いきがい」が奪われつつあることを意味します。

では都市に住む「ひと」たちはもう「自己確立」の機会と「いきがい」を持つことは望めないのでしょうか?そんなことはありません。「まち」にもう一度「自然の秩序」を生み出すことができれば、「自分探し」は可能です。実際の街を事例にしてその可能性を探っていきましょう。

中埜博

(注1)「ザ・ネイチャー・オブ・オーダー」クリストファー・アレグザンダー/中埜博
(注2)「ライフサイクル、その完結」E.Hエリックソン/J.Mエリックソン



【「合歓の郷リゾートヴィレッジ」取材しました】

キーワードは「自由」、どんなライフスタイルも自分次第

志摩半島に位置する合歓の郷リゾートヴィレッジ。ここには、様々なライフスタイルをつくりだす達人たちが集まっている。ここで過ごす時間に共通するのは、まさらの「自由」。普段の生活ではあきらめてきたことも、ここでならできる。ずっと夢見ていたことにもじっくり挑戦できる。この地の大きな魅力のひとつは、年間を通じて寒暖の差が少ない、穏やかな気候。夏のさわやかな涼しさと冬の暖かさは、ここに住まうひとたちの活動をしっかりと根底でサポートしてくれる。海と山両方の恵みを存分に受けて過ごす時間は、まさにリゾートライフという名にふさわしい。別荘地の中を散歩すると、まず大きな空が目に入る。電柱のない美しい環境の下、趣向を凝らした別荘が立ち並び個性的な暮らしぶりが感じられる。リタイア後に完全に住まいをここに移したというご夫妻もいれば、週末や長期休暇のたびに利用しているというご家族、親から受け継いだ別荘に自分たちで少しずつ手を入れるのが楽しいと笑う若者たちの姿も。ここでは、誰もがみな自分自身の「好きなこと」をごく自然に手にしている。

合歓の郷リゾートヴィレッジの街並みと住んでいる方たち



ライフスタイルを楽しむオーナーさん



現地で管理をされている鈴木さん



合歓の郷リゾートヴィレッジの美しい街並み

60歳。農業、始めました。



街行く人の目を楽しませてくれる緑豊かな佇まい。

広い庭の大部分が緑いっぱいの菜園になってお宅を見つけました。家庭菜園という言葉ではとても表せないような、本格的な「畑」が庭に出現しています。この住まいの主は都会での仕事をリタイアされた60代のご夫妻。合歓の郷リゾートヴィレッジに住まいを移してから、なんと「60の手習い」で農家の方から畑の作り方を教わって、一から始められたということです。今では庭だけでは足りなくてすぐ近くにレンタル菜園まで借りるという熱の入れようです。もちろん成果の方も素晴らしい、季節ごとにいろいろな野菜が豊かに実ります。じゃがいも、にんじん、パプリカ、タマネギ、水菜にチンゲン菜…。収穫した野菜はご近所さんに差し上げたり一緒に庭でバーベキューを楽しむ際の材料にしたりと、コミュニケーションにも大きな一役を買っています。

時間はたっぷりあるから。
あわてずに、じっくりと。

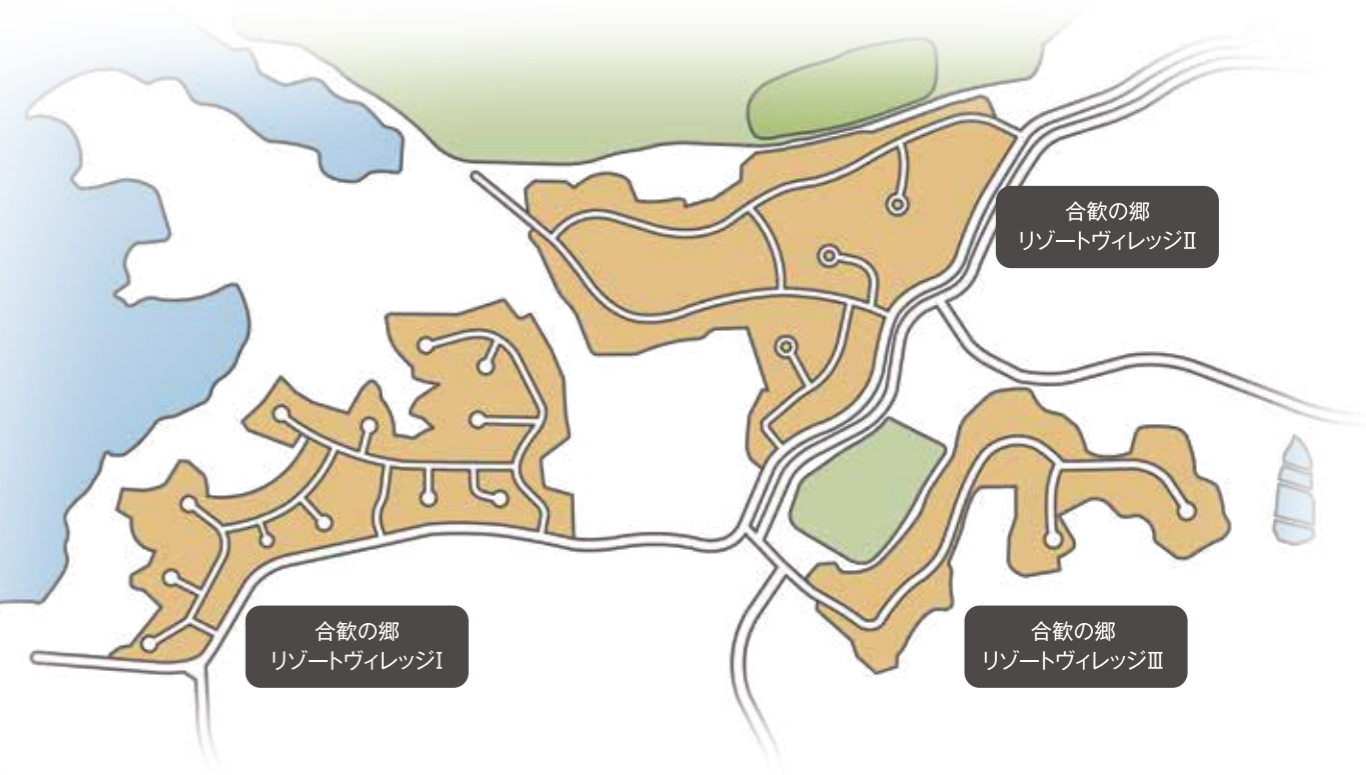


庭やエクステリアはご夫婦の手作り!



最近、名古屋の会社での勤務を定年退職されたというご夫妻は、ご自宅のある名古屋と合歓の郷リゾートヴィレッジを行ったり来たりされています。若いころに別荘目的で買ったものの忙しさに紛れて放っておいた土地に、ようやく建てた新築の家。どんな間取りにするのか、外観の色は何色がいいか、庭はどんなふうにしたいくと毎晩のようにご夫婦で話し合われたそうで、「あんなに二人でゆっくりいろんなこと話したのって久しぶりだったかも」と笑うお二人。庭には、手作りの木製のベンチ。それを囲むアーチを、ひよろりとした薔薇の蔓が巻いています。「薔薇のアーチが見ごろになるのは数年後でしょうね。毎年少しずつ育っていくのを見るのが楽しみ」。いずれはここに永住したいけど、それまでは別荘に出かける!というワクワク気分を楽しんでおきたいということです。

エリアマップ



【未来に向けての提案です】 こんな「まちづくり」をしてみませんか！

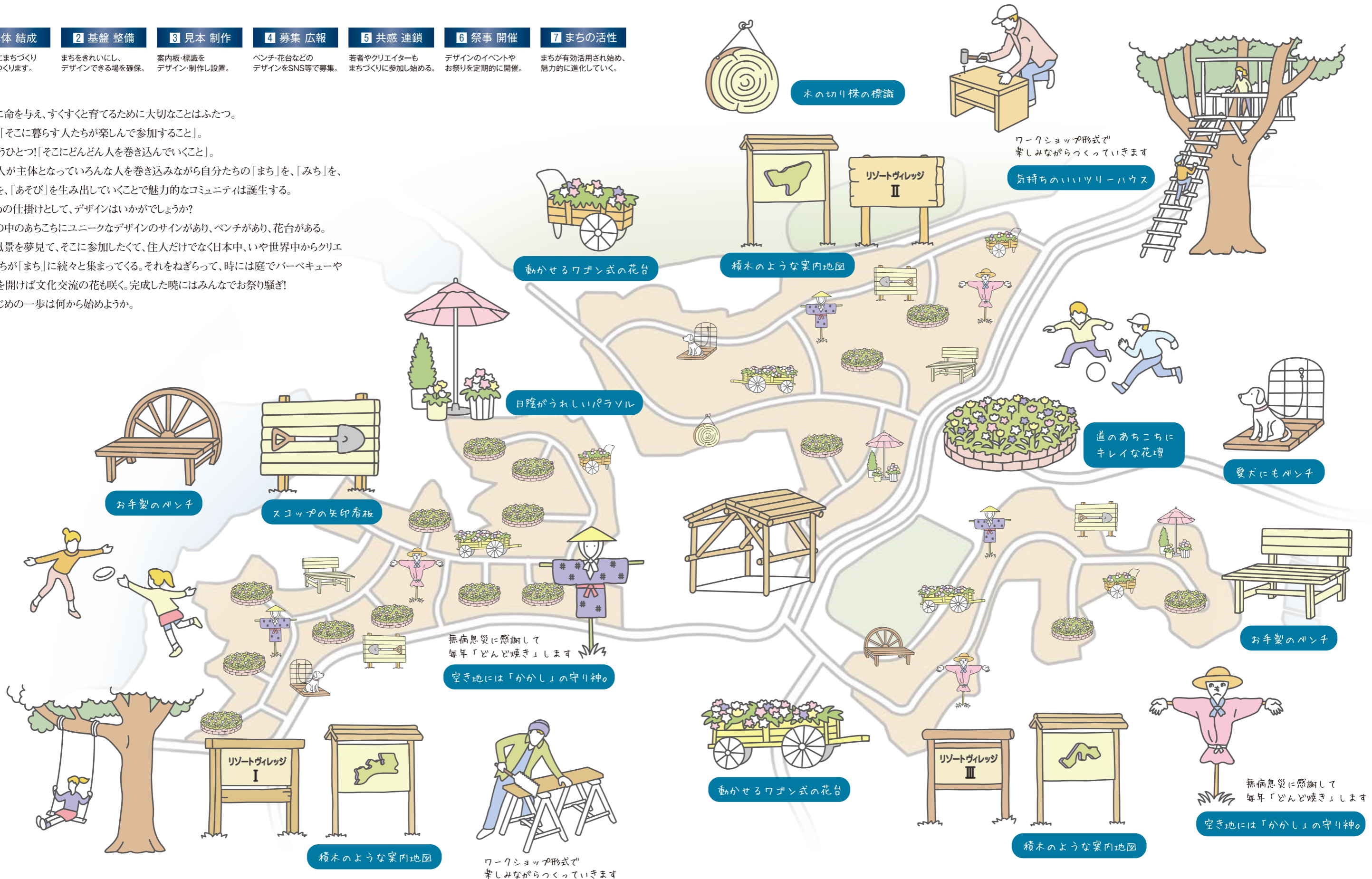
- 1 母体 結成**
- 2 基盤 整備**
- 3 見本 制作**
- 4 募集 広報**
- 5 共感 連鎖**
- 6 祭事 開催**
- 7 まちの 活性**

住民中心にまちづくり委員会をつくります。 まちをきれいにし、デザインできる場を確保。 案内板・標識をデザイン・制作し設置。 ベンチ・花台などのデザインをSNS等で募集。 若者やクリエイターもまちづくりに参加し始める。 デザインのイベントやお祭りを定期的で開催。 まちが有効活用され始め、魅力的に進化していく。

「まち」に命を与え、すくすくと育てるために大切なことはふたつ。ひとつ、「そこに暮らす人たちが楽しんで参加すること」。そしてもうひとつ！「そこにどんだん人を巻き込んでいくこと」。

暮らす人が主体となっている人々を巻き込みながら自分たちの「まち」を、「みち」を、「いえ」を、「あそび」を生み出していくことで魅力的なコミュニティは誕生する。そのための仕掛けとして、デザインはいかがでしょうか？

「まち」の中のあちこちにユニークなデザインのサインがあり、ベンチがあり、花台がある。そんな風景を夢見て、そこに参加したくて、住人だけでなく日本中、いや世界中からクリエイターたちが「まち」に続々と集まって来る。それをねぎらって、時には庭でバーベキューやお茶会を開けば文化交流の花も咲く。完成した暁にはみんなでお祭り騒ぎ！さあ、はじめの一歩は何から始めようか。



ワークショップ形式で楽しみながらつくっていきます

【周辺は魅力たっぷり】

神々を感じる土地に暮らす

三重県のほぼ中央部に位置する伊勢志摩エリアは国立公園にも指定された海と自然の魅力をたっぷりたたえた風光明媚な土地です。リアス式の美しい海岸線、深さをたたえる海の色、海に浮かぶ数多の島々を橙色に染めながら沈む夕陽。伊勢神宮の凜とした美しさには、人知を超えた何かの存在を感じずにはられません。もちろん、海の幸に山の幸。いつの世も人々に喜びを与えてきたおいしい食材にも豊富に恵まれています。旅で数日訪れただけでも、素晴らしい体験が心に残るでしょう。けれど、日々の暮らしの中に、なんでもない日常の一瞬一瞬に神々の存在や息吹を感じられるのは、この土地に暮らす人たちだけの特権です。山の色に季節を感じ、海の波の高さに時の経過を知る。慣れ親しんだ場所で、ある時ふとひらめきを得る。かつて私たちの祖先もこの土地を愛し、自然を畏れ、神々を敬いながらここに暮らしました。彼らの描いたたくさんの夢も、きっとひっそりといろんな場所に残されていることでしょう。



1 伊勢神宮 外宮(豊受大神宮)

天照大御神のお食事を司る御饌都神であり、衣食住と産業の守り神でもある豊受大御神をお祀りしているのが豊受大神宮です。豊受大神宮は、今から約1500年前に丹波の国からこの地にお迎えされました。以来、朝と夕の二度、天照大御神を始めとする神々への食事を供える日別朝夕大御饌祭が続けられています。神宮では外宮先祭といって、まずはこの外宮で祭儀が行われます。



2 伊勢神宮 内宮(皇大神宮)

宇治橋を渡り、美しい玉砂利の参道を進むとそこは静かな神域。約2000年前から五十鈴川のほとりに鎮まります皇大神宮は皇室の御先祖であり、日本人の大御祖神である天照大御神をお祀りしています。平安末期より、国家の守護神として崇められた歴史を持つ伊勢神宮は今もなお全国の神社の本宗として特別な宗敬を集め、日本人の心のふるさととなっています。



3 伊雑宮

天照大御神の御魂をお祀りしている伊雑宮は古くから崇敬を集め、今もなお地元の人々によって海の幸、山の幸の豊饒が祈られる場所でもあります。毎年6月24日に行われる御田植式は国の重要無形民俗文化財にも登録されている雅な神事で、日本三大田植祭の一つです。伊雑宮の周辺では浦島太郎や海女が竜宮へ行ったという伝説が数多く残っています。



5 天岩戸神社

天照大御神が須佐之男尊の悪事を悲しんで岩戸の中に隠れてしまわれたという古事記に出てくる伝説は、日本人なら誰もが耳にしたことがあるでしょう。その時にお隠れになった洞穴がここであると地元では古くより語り継がれてきました。深い緑が茂る杉木立、ひんやりとした空気や湧き出る清水のせせらぎの音に包まれたとき、神話の時代の風景が浮かび上がります。



4 猿田彦神社と佐留女神社

天孫の道案内を行ったことから「みちびきの神様」と呼ばれる猿田毘古神(サルタビコノカミ)が祭られている猿田彦神社。万事良い方向へ導いてくれる神様として名高いゆえに、開運や縁結び、方位除けを願う人々が全国から訪れます。境内にある芸能の神、天宇受売命(アメノウズメノミコト)をお祀りする佐留女神社には芸能人も多く参拝しています。



6 志摩の特産、南張メロンを楽しむ午後。

ビニールハウスが広大な敷地いっぱい並ぶ、志摩市浜島町南張にある川口農園。どのビニールハウスの中にもメロン、メロン、メロン…という、夢のような場所だ。実はこのメロンは「南張メロン」というブランドで、独自に開発した技術によってハウス栽培による通年出荷を可能にし、日本における農業従事者にとっての最高の栄誉「朝日農業賞」も受賞した高級メロンなのである。そのメロンハウスが並ぶ一角に「MELON HOUSE かわぐち」はある。糖度が高くのどしの良い南張メロンを、最もおいしい瞬間に提供してくれるメロン専門のカフェである。カットメロンをはじめ、100%ピュアな生メロンのフレッシュジュース、生メロンパンなど、いずれも他では味わえない新鮮なおいしさを堪能できる。合歓の郷リゾートヴィレッジから気軽に車で行けます。「今日はメロン日和だね」—そんな会話で始まる一日が時にはあってもいい。

